

# 日本経済新聞

大阪天満宮（大阪市北区）に詣でた際、門前に「大阪ガラス発祥之地」という碑があるのに気づいた。確か天満かいわいにはガラス関連企業が幾つかあるが、大阪にガラスとそれほど深い関わりがあったのだろうか。街の歴史をひもといた。



天神橋筋商店連合会会長の土居年樹さん（75）に聞いた。今はマンションなどが立ち並ぶが「この辺りには戦前、数え切れないほどガラス関連工場があり、前を通ると炉の熱気を感じたものです」と話してくれた。

「かいわいは旭硝子や東洋ガラスの発祥の地。工房は江戸時代からあったそうですが、産業として本格的に発展したのは明治以降です」と土居さん。旭硝子の社史を調べると、ルーツは1906年、初代社長が天満付近に設立した合資会社。「当時の最新式ガラス工場」だったという。アサヒグループホールディングスも、山本為三郎・初代社長がかつて、天満周辺のガラス瓶メーカー社長を務めていた。自著に「瓶の製造が縁でサイダーに関係し、ビールに関係することになった」とある

大阪市の資料では、第1次世界大戦で欧州向けにガラス製品の輸出が急増。終戦後の1919年、大阪府には全国のガラス関連工場の約7割に当たる882工場が集積していた。

ガラス産業が発展した背景について、ガラスアーティストで大阪工業大客員教授の岡本覚さん（57）が説明してくれた。「ガラスの量産には、原料のケイ砂や燃料の石炭を運ぶ交通網が欠かせません。水利が発達していた大阪は、ガラス産業が育つ要素がそろっていたのです」

しかし天満で近代ガラス産業が芽吹く契機は何だったのか。大阪市史料調査会を訪ねた。「明治維新直後、様々な官営工場が大阪城周辺に建設されました。中でもガラス産業は、造幣局の存在が大きかったといえます」。調査員の古川武志さん（41）が答えてくれた。

造幣局は明治維新から間もない1871年、大阪・天満の大川（旧淀川）沿いに設立された。「造幣局は当時、国内最新鋭の総合工場。金属精錬に必要な硫酸や燃料に使う石炭ガスなどを自前で製造してたんですよ」と古川さん。その一つがガラスの原材料となるソーダ灰（炭酸ナトリウム）で「明治政府の殖産興業政策で、余剰生産分は民間に安く供給されたのです」。

造幣局は幕末期の混乱した幣制を立て直す国の一大プロジェクトの結晶だった。幕末期に英国に密航留学し近代技術を学んだ長州藩（山口県）出身の5人の志士のうち、井上馨や伊藤博文ら4人が造幣局長を歴任。設立に関わったメンバーには五代友厚、寺島宗則、大隈重信など、そうそうたる名前が並ぶ。

そもそもなぜ、造幣局が大阪に設置されたのか。広報室によると、「維新に貢献した大阪の町衆に配慮した」「大久保利通が唱えた大阪遷都論が影響した」「東京の治安への懸念」「大阪が経済の中心地だったため」など諸説あるが、「はっきりした理由は分からない」そうだ。

ガラス製の魔法瓶開発には、「真空断熱」という当時のハイテク技術が活用された(大阪市北区のまほうびん記念館)

第2次大戦後は市街の発展とともに、公害問題から郊外に移転したり、後継者難などで廃業する企業が相次ぎ、大阪のガラス産業は急速に衰退した。

そんな中で1970年、逆に同市中央区から天満に本社を移したのが象印マホービンだ。同社まほうびん記念館の山口己年男館長（60）は、「理由は定かではないですが、天満がガラス発祥の地ということが当時の経営陣の念頭にあったのかもしれない」と想像を巡らせる。

造幣局がなければ、街は現在の姿とは違う発展をしていただろう。大阪と造幣局に不思議なご縁（円）があったということか。

[日本経済新聞大阪夕刊いまだキ関西 2013年2月13日付]

#### 「大阪ガラス業発祥の地」碑



天満とガラス業と聞いてピンと来る人は少ないと思いますが、天満はそのむかし、ガラスの生産や加工が盛んな土地やったそうです。天満宮の南門の西に、「大阪ガラス業発祥之地」と天満宮の寺井宮司揮毫によって書かれた碑があるのは僕も知ってましたが、いかんせん今の天満にはガラス業と結びつくようなものは、ほとんどない。ほとんどないけど、谷町筋の東側、東天満あたりに、象印の本社があります。そっからの西側、同心町や与力町あたりは、ガラス工場が軒を連ねていたそうです。

旭硝子製作所のでっかい工場があって、徳永ガラスがあって、本州ガラスがあって…。名の知れたガラス工場がいくつもあったのだ。

その周辺には小さなガラス工場が小さな窯をつくって分業で担っていて、加工屋さん、切子屋さん、とにかく、あちこちでガラスを吹く職人さんがいたんだそうです。

ガラス屋が多いというだけでなく、技術力に定評がありました。電球も職人さんがひとつずつ手吹きでつくっていて、腕のいい電球職人がたくさんいた。

象印の本社が今でもこの近くにあるのは、魔法瓶もガラスでできてるんで、創業者は、このあたりの電球職人だったそうです。

昭和 30 年代の終わりころから、消防法がうるさくなって、規制が強化されて、それに対応できないところから順番に消えていったんだとか。

ガラスが溶けるのは 1200 度～1400 度と高温だし、炉のまへはトタンや鉄板で囲ってあるとはいえ、それだけの温度だと危険きわまりないし、火事もあったとのこと。

ガラス業発祥の根拠となっているできごとは...、江戸時代、世界で最も古い色被せガラスである「乾隆 (kenryu) ガラス」が中国から長崎に伝わり、当時の長崎ガラス職人であった播磨屋久兵衛が大坂に呼ばれて、天満界限で製作をはじめたのが最初である、といわれている。



このガラスの評判が江戸に伝わって、江戸切子としてもはやされる。

一方、薩摩切子は、1846 年 (弘化 3 年) に薩摩藩の 27 代藩主、島津斉興が、江戸・加賀屋のガラス職人である四本亀次郎を招いて、薬ビンなどのガラス器の製造に成功したのがはじまりであると言われてます。

江戸時代、ガラスは、「びいどろ」とか「ぎやまん」とか呼ばれてました。びいどろはポルトガル語で吹きガラスのことで、ギヤマンはオランダ語で切子のように彫刻を施したガラスのこと。

ただ、薩摩切子は、一旦、途絶えます。

途絶えていた薩摩切子を、昭和になって復刻させたのが、大阪は天満に本社のあった、日本最大のガラス商社のカメイガラス。学者肌だった社長が薩摩切子のよさを忠実に復刻して、商品化を実現させたのが、今から 30 年くらいまえのことです。

その後、カメイガラスは倒産しちゃったけれども、カメイガラスがなかったら薩摩切子は今みたいに有名にはなっていなかっただろうし、その流れから、現在では天満切子も生まれています。

というふうに、ガラスにまつわる歴史を振り返ると、やっぱ、天満はガラス業の発祥の地というだけでなく、業界発展に果たした役割がデカいな。

#### 「大阪ガラス発祥之地」の碑について

大阪市北区にある大阪天満宮の正門の西側に「大阪ガラス発祥之地」の碑があります。その碑によると、江戸中期の宝暦年間 (1751～1764) に大阪天満宮の前でガラスの製造を始めた長崎の商人・播磨屋清兵衛が、「大阪ガラス商工業ノ始祖」だとされています。播磨屋清兵衛は、オランダ人が長崎に伝えたガラス製法を学び、大阪に持ち込んだのです。

1819 (文政 2) 年には渡辺朝吉という人物が川崎村 (現在の北区西天満六丁目付近) にガラス工場を作ります。同じ頃、ガラスの製造法が江戸に伝わったといわれていますから、ガラス製造の開始は、江戸よりも大阪の

方が早かったこととなります。

明治時代に移るとイギリスから新しい製造技術が入り、北区は、大阪のガラス産業の中心地として成長していきます。

『江戸切子:その流れを支えた人と技』\*1 という本には「大阪のカットグラス」という 1 章が設けられており、大阪のガラス産業の歴史の一端が詳しく記されています。それによると、1875（明治 8）年に伊藤契信が川崎村天満山（現在の北区与力町）にガラス工場を作り、1882（明治 15）年には大阪最初の洋式ガラス工場を新設して、同地に日本硝子会社を設立。1888（明治 21）年には、日本硝子会社を退職した島田孫市が同じ天満地区に島田硝子製造所を興します。この島田孫市は、大阪における洋式切子の端緒を開いた職人の一人であり、大阪の近代ガラスを象徴する人物だったといえます。

これ以後、現在の与力町・同心界隈を中心にガラス工場が増えていき、アジア市場への輸出などもあって、大阪のガラス産業は急速に膨張します。前掲書 p241 には、「昭和初期迄の大阪の硝子業者は小規模ながら、江戸以来の伝統を引く各種珠類、灯火器、瓶類などの薄物製品を中心に、食器を含めて多種多様であり、その業者の数は東京を凌いでいた」との記述もあり、往時の盛況ぶりがうかがえます。（ちなみに、ガラスのビー玉がはじめて国産化されたのも大阪市北区です。）

こうした大阪のガラス産業の移り変わりについては、『新修大阪市史 第 6 巻』\*2 に記されているほか、『北区誌』\*3 や『北区史』\*4 でも断片的に触れられています。

国内の競争や安い輸入品に押されて、隆盛を誇った大阪のガラス産業も衰退し、今では、「大阪ガラス発祥之地」天満界隈からガラス工場はほとんど姿を消してしまいました。しかし、薩摩切子の技術を受け継ぐ「天満切子」が製造されるなど、ガラス産業の伝統は今もこの地に生き続けています。

なお、前掲『江戸切子:その流れを支えた人と技』p243 によれば、「大阪のカットグラスは江戸時代から作られていたことは間違いな」とのことですが、これは今でいう「天満切子」とは異なります。「天満切子」は、北区同心の切子工房が新たに生んだオリジナル・ブランドの名称です。

「大阪市立図書館 HP より [http://web.oml.city.osaka.lg.jp/net/osaka/osaka\\_faq/51faq.html](http://web.oml.city.osaka.lg.jp/net/osaka/osaka_faq/51faq.html)」

#### 【参考文献】

\*1 『江戸切子:その流れを支えた人と技』山口勝旦 里文出版 1993 書誌 ID 0000321736 p241～261

『江戸切子:その流れを支えた人と技』山口勝旦 里文出版 2009 書誌 ID 0011834521 p241～261 ※上のものの新装版

\*2 『新修大阪市史 第 6 巻』新修大阪市史編纂委員会編集 大阪市 1994 書誌 ID 0000427809 p258～259 ほか

\*3 『北区誌』大阪市北区役所 1955 書誌 ID 0000244948 p595

\*4 『北区史』大阪都市協会編集 北区制一〇〇周年記念事業実行委員会 1980 書誌 ID 0070059801 p474

\*5 『日本のガラス:その見方、楽しみ方』戸澤道夫 里文出版 2001 書誌 ID 0010156136

\*6 『なにわの職人"ええなあ"と見惚れる技 60 人』淡交社編集局編 諸木靖宏写真 淡交社 1997 書誌 ID 0000593567

\*7 『まちに活きる技と心:北区の伝統文化と職人さん』大阪市北区役所区民企画担当 2007 書誌 ID 0011745854

\*8 『大阪史蹟辞典』三善貞司編 清文堂出版 1986 書誌 ID 0000214926 p441